
異世界に来たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

かちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に来たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

【NZコード】

N8258Y

【作者名】

かちん

【あらすじ】

裏でも表でも名の通る最強の殺人鬼集団・洞岳家。

その中でも最強と謳われている洞岳家長男・洞岳謙戯。

彼の殺人能力は「影質操作」。

今日、「絶対不可侵領域」の女・地獄院天音を殺すために、謙戯は第三総合闘技場に向かう。

奇襲を仕掛けようとしていた矢先に、彼は激しい頭痛に襲われ、意識を失う。

目が覚めるとそこは、ハイテクノロジー満載の近未来の世界。

異世界だった。

その世界、謙戯が元居た世界のように、超能力や魔術が発達した世界ではなく、

科学技術の進歩により、「武装機械」と呼ばれるバトルスースが開発された世界だった。

軍事力で世界の支配権を実質握っている企業・オーバーデッド社、そして、

オーバーデッド社壊滅を企み、世界平和を訴えるテロリスト・ジャステイス。

ひょんな事から、ジャステイスのテロに巻き込まれた謙戯は、彼らと共にテロ活動をすることを強要される。

そこから始まつたのは 異世界と世界を巻き込む巨大な陰謀だつた……。

異世界トリップものですが、勇者ではありません。

完全に悪役に近い主人公です。

後にタイトルを変えたいと思つてます。

序章（前書き）

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

裏でも表でも名の通る殺人鬼集団がいる。

彼らの名は 洞岳家。ほりだけ誰もが知る、殺人一家だ。

表では、国際指名手配されるほどの人気度で、度々ニュースに上ることがあるが、毎度のことトップニュースを得ている。

しかし彼らが警察機関等にどうこうできるほど、優しいものではないぐらい、誰もが認知していることだった。

彼らはトリックキーな殺人を繰り返す。中には人間業とは思えない殺人手法もある。当然、マスコミは政府に圧力を掛けられ、そんな奇怪な殺人行動については一切報道してはいない。

裏でも表でも名の通る、と言つたが、そのとおり、裏でも名高い殺人鬼集団だ。

裏というのは世界の裏表の裏に位置する 一般人の知らない世界だ。

それは、人智を超えた存在だったり、架空と思われていた存在だったり。超能力や魔術といったものが関与しているといつても過言ではない世界だ。

洞岳家はその裏の世界に浸透しているが、暴れすぎて（殺しそぎて）一般市民にも知られるようになってしまったわけだ。

裏の世界で有名なのは実に簡単な事で 多くの殺人鬼集団がある裏世界で、最強と謳うたわれた集団だからだ。

どの殺人鬼も、洞岳家と聞けば恐怖し、憤怒する。

それは、自分達よりも「強い」という概念が、社会に染まっているからである。

裏世界では、洞岳家を狙う者達が多い。しかしそれが無謀であると考えているものも多い。

そんな、最強と評価される洞岳家の中でも、最強と呼ばれている存在がいる。もっとも、この場合は世間にではなく、家族の中で、

と限定された話だが。

彼の名は 洞岳謙戯。
ほらおかけんぎ。

洞岳家長男にして、最強の殺人鬼である。

姉が三人、妹が四人、弟が一人、両親、といった大家族の中でも、それらすべてが最強の殺人鬼集団としての血を引いているのに、その中で最強と呼ばれているのだから、実質世界最強の人間であることは間違いない。

一八歳。一般的に高校三年生で受験シーズンという大変な時期の年頃の彼だが、殺人鬼であるから学校になど通つておらず、専業の殺し屋として金を手にしては食つて寝て生きる、といった生活をしている。

今日、彼は一つの依頼を遂行中だった。

それは、殺人鬼集団序列七位と称される 地獄院家の一人・地獄院天音の抹殺、である。

今回、標的はボディガード四人を連れて、大刀洗山を訪れる、という情報を入手していたため、謙戯は単身でそこに乗り込み、地獄院天音を捜索中だった。

大刀洗山といえば、魑魅魍魎ちみもうりょうが渦巻くパワースポットとしては世間的に有名であるが、そんなことは嘘つぱちである。眞実はとくと、殺人鬼がやけに徘徊するという、魑魅も魍魎も関係ないものだ。徘徊する理由としては、修行場として使われていることが多い。自分特有の殺人手法を向上させるためというのが通常だ。

森林に溢れる大刀洗山だが、中心部だけは場違いな闘技場が建てられている。昔、殺人闘技場として使われていたという伝説が残っているが、その物語は表で公表されにくい醜い話である。政府のお偉いさんや、それ以上に権力を持つもの達の、鑑賞という名目の殺人ゲームだったのだ。

死刑囚と死刑囚同士のデスマッチが基本的だつたのが、段々と一般人を巻き込んでいくものになつていき、そこに喝を入れたのが消下家という殺人鬼集団序列一位の者達だった。

そういうわけか、殺人鬼にとつては因縁深い、恨みの矛先でもある大刀洗山に潜入というのは、一殺人鬼の謙戯にとつては、少しばかり嫌気が差す任務だった。

目的は目標の抹殺。

それは簡単な事である。

地獄院天音という女の能力は『絶対不可侵領域』。所謂バリアのような物を作ることで、自分自身へのあらゆる干渉を否定する力だ。人智を超えた能力。それこそが、殺人鬼としての特徴でもあるのだ。そんな大層な能力を持つ彼女が相手でも、洞岳謙戯にとつては苦戦すらしないだろう。

故に彼は地獄院天音と一度対峙した過去があり、余裕で勝利を收めている。殺人鬼同士の誇りによる小さな喧嘩だったが、それでも実力が謙戯にあることに変わりはない。

天音が居るであろう中心部の闘技場に足を運ぶ謙戯は、段々と視界に入つてくる黒スーツの男たちの視線を避けながら、隠密に彼女へと近づいていった。

謙戯の行動は完璧だった。

立派な殺人鬼として、否、ここでは暗殺者と表現すべきか、彼は地獄院天音との距離を百メートルまで縮めた。

闘技場内部である。

観客席階層と思われる一階に身を潜める謙戯は、一階で白いコートの人々と会話を繰り広げる天音の姿をしっかりと見据えていた。白いワンピース姿に、白の長髪。美貌の姿に目がいつてしまつとう現象もあり得るが、謙戯の場合は殺しの対象としか見えていかない。

「……なんだあの連中は」

此処に来て、初めて口にした謙戯は、地獄院天音と交渉らしきことをしている白コートの人々を見て、疑念を感じていた。

やがて、天音と白コートの人間達の会話が終わつたのだろう、天音達は別々の方向へ歩き始めた。交渉が何かの終了だろう。謙戯は白コートの連中を怪しいとは少しばかり思いながらも、今回の目標

である地獄院天音を視界に捉え、しっかりと彼女のスキを待つていた。

彼女が《絶対不可侵領域》である以上、スキのない攻撃は全て「見えない壁」によって防御される。それは過去の対峙において経験したことだ。謙戯は彼女の《絶対不可侵領域》を打ち破る方法はただひとつとしか考えていなかった。

それは　　能力発動前に殺す事。実に単純な事だった。
いわば奇襲だ。

そして、そのタイミングはやつて來た。

地獄院天音が手に提げていたバッグから携帯電話を取り、耳に当てたその瞬間

「　ツ」

謙戯は一階から飛び降り、そのまま一気に駆け出すと共に、周囲の床に映る「影」を手に纏い、その漆黒を槍のような形状に変え、地獄院天音の方向へそれを瞬時に伸ばした。

だがしかし、その攻撃行為と同時に、謙戯自身に大きな負荷が掛かつた。

それは、能力使用によるリスクではない。

普通ならあり得ない現象だった。

「……ツなアツ！？」

激痛だった。

外部からではなく、内部からの痛みだ。
頭蓋骨が振動するようなものだつた。

伸びていた「影」は地獄院天音の三メートル前で途切れ、虚空に消えた。

謙戯の腕に纏っていた漆黒は徐々に消えた。
かげ

天音は突然の事態に驚愕し、携帯電話を思わず手放してしまった。床に落ちた携帯電話の衝撃の響きは、謙戯の悲鳴でかき消された。

「うわあっああああああああああああツツ！！」

洞岳謙戯はその場でもがき苦しみながら、目標を殺そうという信

念のもの、必死に『影質操作』を発揮しようとしていた。彼の能力であり、彼の存在価値。世界に存在する「影」を特殊物質として扱う力。

だがそんな最強の名の下に置かれている力も、今では発揮すらされなかつた。

叫びを上げる謙戯は、原因不明の頭痛に苦しみ、そして最後には倒れた。

ただ、彼の遠くなつていく意識の中には、地獄院天音の動搖つぶりが理解出来るほど、彼女の声が慌ただしく聞こえていた。

「洞岳謙戯よ！ 私を殺そうとしてたみたい！ ……至急こつちに来て！ ……つて、……あれ？」

携帯電話を拾い上げ、必死に電話越しの誰かに事情を説明していった天音だったが、いざ振り返つて謙戯のもとを見てみると、そこに、 彼の姿は無かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8258y/>

異世界に来たのは“勇者”ではなく“殺人鬼”

2011年11月24日19時52分発行